

# Chlorpromazine Treatment of Epileptic Patients, especially of Epileptic Excitement

Mamoru Seki, Toshiko Seki  
Tetsuo Futatsugi, Akira Nakata  
Department of Neurology, Faculty of Medicine,  
Shinshu University  
(Director: Prof. S. Nishimaru)

Although the period of observation is admittedly quite short, the results so far observed indicate the following conclusions:

- 1) Chlorpromazine is highly effective and dramatic in controlling epileptic excitement and behavior disturbances.
- 2) Chlorpromazine is not a specific medicine for epilepsy. It has an influence only upon clinical psychic symptoms.
- 3) The dosage and the period of medication may be variable among individuals. And the standard methods of therapy have to be studied.
- 4) The alleviating effect upon seizure frequency by the drug is not clear.

## 過去10ヶ年間に於ける腎結核手術成績

昭和30年12月17日 受付

長野赤十字病院皮膚泌尿器科  
部長 奥井重敬  
副部長 増田圭喜  
医員 児玉和志  
長野市古里診療所  
米沢敬吾

### 緒言

腎臓結核は化学療法の発達した現在に於ても、その治療法は手術に依る以外なく、最近部分切除術が行われる様になつたが之も手術というに変わりがないのであつて、たゞ化学療法のそれが腎結核患者の手術適応を拡大したり或は、その予後を良好にするに過ぎず、今後もこの手術という時代は当分避け難いであろうと思ふ。

我々は本誌2巻1号に昭和20年月より、昭和24年7月に至る間に手術を施行した腎結核100例に就て主としてその予後に関して報告したが、その続報という意味で過去10ヶ年、即ち昭和20年8月より昭和30年7月に至る間に別出した腎結核患者279例の手術成績について若干統計的観察を試み、更に前回報告分と比較検討考察を加えて見たいと思ふ。

之等患者の予後はその判定明らかなる者を除き、すべて往復文書により問合せたものであつて、住所異動その他による不明6例を除きすべて予後の判定をなし得た。併し乍らその遠隔成績は最近3ヶ年の者は満3年を経っていないので、一応全別出例の統計を掲げ次で遠隔成績に関して述べることにする。

### A 過去10ヶ年に於ける腎結核手術成績(279例)

(1) 年度別別出術数 (第1表)

之は昭和20年、並に30年は約半ヶ年の数であるために之を除き、最高は29年の39例、最低は21年の19例であり、年平均は29例となつている。

### (2) 性別・年齢別・罹患側別 (第2表)

性別では155:124で男性がやゝ多いが之を以て腎結核が男性に多いと既断するわけには行かない。年齢的には諸家の統計が示す如く21~30才代が最も多く、

第1表 年度別別出術数

年度	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	計
例数	3	19	35	28	25	26	23	33	32	39	16	279

第2表 性別・年齢別・並に罹患側別

年令	性		罹患側		計		総計
	男	女	右	左	右	左	
10才以下	1	0	0	0	1	0	1
11 ~ 20	5	10	7	6	12	16	28
21 ~ 30	36	30	26	23	62	53	115
31 ~ 40	30	22	15	20	45	42	87
41 ~ 50	8	5	7	10	15	15	30
51 ~ 60	4	4	6	3	10	7	17
61才以上	0	0	0	1	0	1	1
小計	84	71	61	63	145	134	279
総計	155		124		279		

次に31~40才代、41~50才代、11~20才代の順となっている。最も21~40才で202例と大半を占めている。最低年齢は9才、最高年齢は62才となつている。左右罹患側別では145:134で右側が左側よりやや多いが之も右側に多しと即断出来ない。

(3) 治療成績 (第3表)

治療成績に関しては次の四つに分類した。

完全治癒……現在泌尿生殖器結核並に他の結核症の症状全くなり、健康人と同様に生活しているもの。

軽快……膀胱症状、瘻孔形成或は他の結核症にて現在療養中のもの。

死亡……

不明……住所異動その他で現況を確め得ないもの。

第3表 治療成績

完全治癒	182 (65.2%)
軽快	32 (11.5%)
死亡	61 (21.9%)
不明	6 (2.2%)

完全治癒率は65.2%、死亡率は21.9%、軽快11.5%となつているが、軽快が比較的多いのは最近の症例も含んでいるため、此の内の一部は将来予后不良となるものもあるが、大部分は完全治癒に移行するもので、斯る点より見れば必ずしも悪い成績ではない。

(4) 死亡統計 (第4表)

死亡例61例に就てその死亡時期、死因に関して調査したものであるが、Israel (1911) の分類に従つて次の如く分類した。

手術死亡……死因が患腎別出の手術的侵襲に直接

的關係があると思われるもので手術後1ヶ月以内の死亡。

近期死亡……手術に堪え得たが、手術が死因の間接的誘因となつたと考えられるもので、手術後6ヶ月以内の死亡。

晩期死亡……死因が手術とは無関係のもので手術後6ヶ月以後の死亡。

之等の内訳は遠隔成績の項に於ける死亡統計と全く一致しているので詳細は後述する。

B 遠隔成績

凡そ腎臓結核の手術成績は術后相当の年月を経た患者の状態を以て判定すべきことは従来から申されていることであり、手術後日浅いものを含めた場合の成績は正しいものとは云えない。我々は術后満3年以上経過したものを以て遠隔成績の判定を行つたもので、従つてその期間は昭和20年8月より昭和27年12月迄、即ち7年5ヶ月間に別出術を行つた192例である。

i) 性別・年齢別・並に罹患側別 (第5表)

性別では男性がやや多く、年齢別では21~30才代、31~40才代が圧倒的に多く、次いで11~20才代、41~50才代の順となつている。最低は11才、最高は62才である。罹患側では右がやや多い。

ii) 治療成績 (第6表)

總手術数に比して、遠隔成績の方がその成績に於て劣るのは当然であるが、死亡が61例(31.8%)は稍々高率であると申さねばならない。因に諸家の成績を掲ぐるに中川・小池(46.3%)、北川・岡部(30%)、高橋他(26.9%)、渡辺(16%)、志賀(17.2%)、山田(19.1%)、井上・渡辺(20.6%)、加納(34.3%)、原田・辻(21.9%)、山本(29.1%)、市川他(29.1%)等の報告

があるが、之等に比すると稍々高率であると申さねばならない。併し之等の統計は夫々その統計をとつた時期が一定していないために簡単にその良否を論ずるわけには行かないと思う。而も我々の7年5ヶ月に於ける時期たるや敗戦后生活環境の最も低い時期であり、亦その成績を左右する次の諸条件があるからである。我々が一応注目して

第4表 死亡統計

種類	手術死亡		近期死亡		晩期死亡						死亡時期不明		計		総計
					6M~1j		1j~2j		2j以上						
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
衰弱	2	4											2	4	6
髓膜炎	1		1	2	1	1	3	1	1				7	4	11
肺結核			1	1	3	1	1	1	4	1		1	9	5	14
粟粒結核				1					1				1	1	2
肋膜炎		1											0	1	1
腹膜炎						1			1				1	1	2
残腎結核						2	4		7	2			11	4	15
カリエス							1			2			1	2	3
結核以外			1					1	2				3	1	4
不明							1		1		1		2	1	3
計	3	5	3	4	4	5	10	3	17	5			37	24	61
総計	8		7		44						2		61		

調査した諸条件と予後の関係に関して若干述べて見たい。

第5表 性別・年齢別・並に罹患側別

年齢	性別		罹患側		計		総計
	男	女	右	左	右	左	
10才以下	0	0	0	0	0	0	0
11 ~ 20	3	10	4	4	7	14	21
21 ~ 30	29	23	18	16	47	39	86
31 ~ 40	20	13	11	13	31	26	57
41 ~ 50	6	4	4	6	10	10	20
51 ~ 60	1	0	4	2	5	2	7
61才以上	0	0	0	1	0	1	1
小計	59	50	41	42	100	92	192
総計	109		83		192		

第6表 治療成績

完全治癒	106 (55.2%)
軽快	21 (10.9%)
死亡	61 (31.8%)
不明	4 (2.1%)

a) 腎病変と遠隔成績 (第7表)

腎病変の分類は志賀氏の分類に従つて次の如くにした。

- 初期……最初期乳頭期結核、並に初期崩壊性乳頭期結核。
- 完成期……乾酪性崩壊性乳頭結核、及び乾酪性空洞性乳頭腎盂結核。
- 末期……結核性膿腎。

即ち、初期の病変に於て剔出を行つたもの程予後が良好であり、末期のもの程成績が悪くなつている。

第7表 腎病変と遠隔成績

腎病変	成績	完治	軽快	死亡	不明	計
初期		37	2	6	0	45
完成期		63	16	41	4	124
末期		7	2	14	0	23
計		107	20	61	4	192

b) 合併症と遠隔成績 (第8表)

この合併症というのは手術時に於て有していたり、或は手術直後発症せるもので、結核性疾患以外のものは重要なものもなかつたので合併症なしの項に入れた。亦人の患者が2種以上の合併症を有していたものはその重要な方を取り、軽度な方は除いた。

即ち合併症のあるものはないものより成績がはるかに悪く、特に肺結核を手術時に有していたものは半数以上死亡した。

第8表 合併症と遠隔成績

合併症	成績	完治	軽快	死亡	不明	計
肺結核(開)		1	3	5	0	9
全(非開放性)		11	1	14	1	27
肋・腹膜炎		4	0	4	0	8
骨・関節結核		3	2	3	0	8
その他結核		14	1	8	0	23
合併症なし		74	13	27	3	117
計		107	20	61	4	192

c) 生活環境と遠隔成績 (第9表)

結核性疾患の治療に當つてはその環境たるや極めて重要な因子であることは間違なく、如何なる優秀な医師が如何に優良なる薬剤を投与するとも、不潔なる空気と、不良なる食事を摂り、仕事をするならば必ずやその結果は明らかである。

此の期間は終戦後の家庭経済の不安、食糧難等から充分に療養をなし得たという患者は1人もなかつたと云つて良く、この事が我々の成績を不良ならしめた1つの因子と考え、次の如く分類して生活環境と予後の関係を調査して見た。

第9表 生活環境と遠隔成績

環境	成績	完治	軽快	死亡	不明	計
上		46	7	4	0	57
中		54	9	28	1	92
下		7	4	29	3	43
計		107	20	61	4	192

生活環境上……長期に亘つて充分な療養と栄養を与えられたもの。

生活環境下……家庭経済の事情により長期療養出来ず、亦退院後間もなく仕事に従事したもの。

生活環境中……中間に位するもの。

之等手術患者の生活環境をこの様にはつきり分類することは我々の主観も含まれる事であるが、上に属する人々は著しく成績が良く、下に属するものは甚しく成績が悪かつた。この事は今後の治療面で考慮しなくてはならない問題であろう。

d) 化学療法使用の有無と遠隔成績 (第10表)

我々の所で腎結核患者に対して手術前後よりストマイ(SM)、パス(PAS)を本格的に使用し始めたの

第10表 化学療法使用の有無と遠隔成績

成績	例数	完治	軽快	死亡	不明
使用せざるもの	173	93 (53.8%)	17 (9.8%)	61 (35.7%)	2 (1.2%)
使用したもの	19	14 (73.4%)	3 (15.8%)	0	2 (10.5%)

第11表 年度別死亡例の死亡時期

年 度	手 術 数	死 亡 例	手死 術亡	近死 期亡	死亡時期											死時不 亡期明	
					6M~1j	1j~2j	2~3	3~4	4~5	5~6	6~7	7~8	8~9	9~10	10~11		
昭20	3	1															1
21	19	9	1	1	2	4				1							
22	35	19	3	2	3	4	4	1	1		1						
23	28	9	1	2	1	2	1	1			1						
24	25	10	1	2	2		1	2	2								
25	26	7				3	2		1								1
26	23	4	2		1				1								
27	33	1					1										
28	32	0															
29	39	0															
30	16	0															
計	279	61	8	7	9	13	9	5	5	1	1	0	0	0	0	0	2

は昭和27年6月頃からであり、それ以前には少数例の患者の希望により授与したのもあるという程度である。併し乍ら中には退院後に通院中或は地方医の許にてSM, PAS を使用したのもあると思ひ、その旨を問合せたのであるが、充分な回答が得られず統計的な観察が出来なかつたので、已むなく我々の所で入院中手術前後より使用したものと使用せざるものとに分けてその成績を見た。使用量は殆んど一定してSM 20gr, PAS 500gr であり、その使用法は大部分は手術直後よりSM 週2回, PAS 6~10gr 内服で一部には手術前より行つたものもあり、亦 PAS 500gr 服用后ヒドレジット内服 (80~150mg) を行つたものもある。

この結果化学療法を使用したものは死亡者なく、全治が73.7%に達し、化学療法を使用せざるものは死亡は35.3%, 全治が53.8%という成績である。化学療法を使用したものは症例も少く、而も昭和27年頃の症例であり、使用せざるものは昭和20年~昭和26年の症例で時期的な相異があるため之を以て云々することは早計であるが、少くとも各種の結核治療剤の出現は腎結核手術の予後に極めて良好なる効果を示すことを暗示或は予測せしむるものと思われる。

iii) 死亡統計 (第4表参照)

前述の如く279例中61例の死亡者を出しているが、遠隔成績の対照中にあるものが61例であるので昭和28年以後は1人の死亡者も見えていないわけである。

即ち3年以上経過せる例では31.8%, 3年以内のものも含めた場合は21.9%、の死亡率となつている。

之等の死亡例の死因を観察して見るに第4表の如くであるが、残腎結核, 肺結核が最も多く、次に結核性髄膜炎が多い。結核以外の死亡は急性肺炎, 胃潰瘍, 心臓疾患, 腎炎各1例計4例となつている。

亦死亡時期は晩期死亡が殆んどであり、特に手術后6ヶ月3乃至年の間に多い。(第11表)

手術死亡は例で剔出192例の4.6%に当り, Israel (10%), Wildbolz (5.8%), Rovsing (3.3%), 志賀 (2%), 杉村 (11%), 中川・小池 (5.3%), 北川・岡部 (4.6%), 高橋他 (3.3%) 等に略々匹敵する。この死亡は殆んど末期腎結核で巨大腎膿腫を作つていたものである。

iv) 軽快者統計 (第12表)

之は3年以上経過したものでは21例であり、膀胱症状を猶有しているものが最も多いが、瘻孔形成は1例であり、亦尿管下端狭窄のため無尿を起したため尿管切開

第12表 軽快者現況

種別	術后年数								計
	3j~4j	4j~5j	5j~6j	6j~7j	7j~8j	8j~9j	9j~10j		
膀胱結核	5	2	2	3			1		13
肺結核	3				1				4
腹膜炎		1							1
瘻孔形成	1								1
残腎結核		1							1
カリエス	1								1

第13表 前半・後半の比較

	例数	完治	軽快	死亡	不明
昭和20年8月~昭和24年7月 (昭和27年11月調)	100	53 (53%)	4 (4%)	37 (37%)	6 (6%)
昭和24年8月~昭和27年12月 (昭和30年12月調)	92	57 (62%)	15 (17%)	16 (17%)	4 (4%)

により人工尿管を作つたものが1例ある。

### C 前半・後半の比較 (第13表)

前半とは昭和20年8月より昭和24年7月に至る満4年間の100例を満3年後の昭和27年11月に統計観察したもので、既に本誌2巻1号誌上に発表済であり、後半とは昭和24年8月より昭和27年12月迄の満3年ケ5月間の92例を満3年後の昭和31年12月に統計をとつたものである。表の如く後半は前半に比するに死亡が著しく減少しているし、亦治癒率も可成りの上昇を示している。

此の原因は色々あると思うが、最近の社会情勢の好転、ペニシリンの出現、SM、PAS 其の他の結核化学療法剤の出現等に起因せしめることが出来ると思ひ、恐らく今後成績は更に向上せしむることが出来ると思われる。

### 考按並に結論

緒言で述べた如く、腎結核が手術以外に治療法がないということは今後当分避けられない所であるが、常にその成績が向上さるべく努めることは当然である。この成績を向上させる要因は何処にあるかと云うに、化学療法の進歩、医師の技術向上等ということは勿論あつかつて力ある所だが、生活環境の改良という問題は速かに解決されなくてはならない問題だと思ふ。我々の生活環境と予後の統計が示す如く、充分療養が出来、栄養も充分に与えられたものが良い結果を得ているし、術後早期に退院し家庭経済を救うために働かねばならなかつたという患者が多くあり、而も之等の患者の予後が著しく悪いことを見ればこの環境の改良を強調したい所以である。幸に最近SM、PASも比較的容易に使用出来るようになり、且第一回の報告より著しく成績が向上し、猶亦昭和28年以降に於て1例の死亡者も出してないことは、今後更に成績がよくなるであろうことを充分予測せしむるものである。

(本論文の要旨は日本泌尿器学会第21回信州地方会に於て発表した。)

### 主要文献

- ①Hottinger, R., Zsch. f. Urol. 18. 1924.    ③Israel, T. W., Chir. d. Niere u. d. Harnleiters 1952.  
 ②Toly, J. Swift, Brit. T. of Tub. 19, 1925.  
 ④Wildbolz: Zsch. f. Urol. Chir. 8. 1922.  
 ⑤Thomson-Walker, John: Brit. Med. J., No., 3483. 1927.    ⑥Emmett, L. & W. F. Braash: J. of Urol. 40. 1938.    ⑦Grunberg, M. E. Werschub & Auerbach: J. of Amer. Med. Assoc. 104. 1935.  
 ⑧大桑: 十全会誌, 42. 昭12.    ⑨大桑: 十全会誌,

44. 昭13.    ⑩高橋他6氏: 皮尿誌, 46. 昭13.

- ⑪山田: 日泌尿会誌, 31. 昭16.    ⑫山田: 日泌尿会誌, 32. 昭17.    ⑬市川: 日泌尿会誌, 29. 昭15.  
 ⑭小山: 日泌尿会誌, 39. 昭22.    ⑮山際: 臨皮泌, 3. 昭24.    ⑯伊藤外1氏: 臨床と研究, 29. 昭27.  
 ⑰外塚外1氏: 皮と泌, 14. 昭27.    ⑱山田: 東北医誌, 46. 昭26.    ⑲柴田他: 名市大医誌, 1. 昭25.  
 ⑳岡: 皮紀要, 47. 昭26.    ㉑安部他: 皮と泌, 14. 昭27.    ㉒奥井他: 信州医学雑誌, 2. 昭28.    ㉓市川他: 日泌尿会誌, 45. 昭29.

## On the Results of Operative Treatment for Renal Tuberculosis during the Past 10 Years

Shigetaka Okui, Keiki Masuda,  
Kazushi Kodama, and Keigo Yonezawa  
Department of Dermatourology, Nagano Red  
Cross Hospital

Statistical observation was made on 279 cases surgically treated during the past 10 years from August 1945 to July 1955.

In total 182 cases (65.2%) were cured, while 61 cases (21.9%) were dead. When observed 192 cases treated from August 1945 to December 1952, which passed over years after the operation, 106 cases (55.2%) were completely cured and 61 cases (31.8%) were dead.

The result of cases treated from August 1945 to July 1949 was previously reported in this journal in 1953. A remarkable progress was seen in the result from August 1949 to December 1952 as compared with the previous one. This may be due to the improvement of social condition and reasonable application of antibiotics, which will give us an expectation for a further improvement in the treatment of this disease.